

# 見えない戦争

—第一次世界大戦とロレンス—

平 井 雅 子

(これは、2004年度女性学インスティテュート公開講座における講演の原稿であり、基となる研究に対し、同インスティテュートの助成を受けた。)



写真1

私の講演のタイトルは「見えない戦争」ですが、最初に上の1枚の写真をご覧下さい。ここに写っているのは何か、想像してください。「見えない戦争」と言いましたけれど、具体的には、第一次世界大戦です。ここに写っているのは第一次世界大戦の一コマで、もう一つ言うとベルギーのフランダース・フィールドと言う一番の激戦地だったところです。今でも“thousands and thousands”と言いますけれど、ロシア軍が八百万人亡くなっています。軍人は両方合わせて一千万人、普通人が巻き込まれて一千万人亡くなっていますし、負傷や疫病など、他の原因で亡くなった人が二千万人と言われています。ですから、亡く

## 見えない戦争

なった人だけでも四千万くらいあるわけで、数知れない。ですから、戦跡地めぐりをしますと、ベルギーからフランスにかけての辺りというのは、お墓だらけなんですよね。墓地がずっと見渡す限り、というような情景が広がっているところがある、それがフランダースなんですけれども、これは戦争中の写真の絵葉書です。この横になっているような、ヘルメットをかぶっている人はどちらの軍の人で、何をしていると思いますか？何をしている、いかがですか？

そうです。死体ですよ。イギリスだけではないんですけれど、イギリス軍側連合軍か、ドイツ軍側か、どちらだと思います？この死体は……。

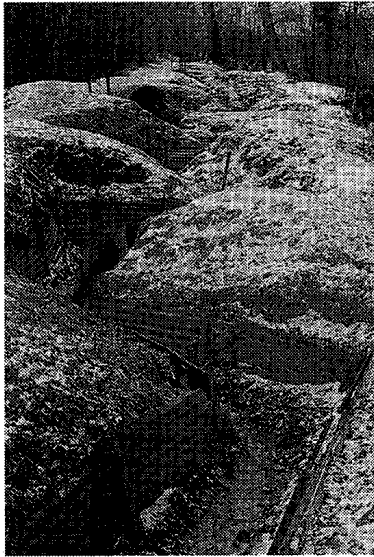


写真2



写真3

第一次世界大戦では、塹壕戦といって、上側の写真のような塹壕を掘って両軍が対峙した膠着状態が続きました。短期決戦と言うのをどちらの将軍たちも狙ったわけですね。だから短期で肉弾戦でバーっと行くわけなので大量の死者が出るんですけれども、それが肉弾戦で突破できないんです、どちらも。それで塹壕を掘って、土を2メートルほど掘ってですね、両側を木でせき止めて落ちてこないようにして、そういうところで生活しながら何年にも渡って戦っていました。1914年から1918年までです。だから雪の時は写真2のようになりますし、雨が降れば洪水のようになって腰まで泥の中に漬かるというようなことがあります。そして、飛び出していっても機関銃で狙われているんですね。一

方では近代兵器があって、出て行けば打たれる。けれど突破するためには出て行かなくてはならない。“One”という人と“two”という人のグループを組みまして、並んで“One, Two, One, Two…”と言って交互に飛び出していくわけですね。用意していて、Oneの人が飛び出して行って打たれたら次はTwoの人が行くと言うような感じですか。どちらが出て行くか分からないが、“Two!”と言われるとその瞬間、自分がTwoだったら飛び出して行って、ダーっと撃たれるのです。私も見ましたけれど、爆弾が落ちたところはマンホール状の穴があいて、ところどころ、大きな池のようになっていたり、それが当時は人の死体でいっぱいになったとかですね。本当に無駄死にという感じですか。戦車もできかけた頃で、防御の方が整っていないで、攻撃の方がひどかったのもそういう風になった。それが塹壕戦ですよ。塹壕も穴も、間の道も、雨が降るとどろどろになりました。亡くなった人を運ぶのも木を組んだだけの道を行くんですけれど、濡れてスリップするんです。重い死体をストレッチャーと呼ばれる板にのせて運んで、つい足を滑らすとずるずると落ちてしまったら、今度は底なし沼みたいになってその人も死んでしまうというような状態を想像してみてください。

さて、最初の写真に戻って、この人はどちらの軍の側でしょう？ヘルメットが深いですし、この人はドイツ兵ということになります。そうするとその向こう側にいる兵隊はどちらでしょう。担いでいるのがどうやら撮影するカメラらしいですね。ですから、これはイギリス兵のカメラマン。で、もう一つこちらからカメラで撮っている人がいますけれど、それもイギリス兵です。そういう一枚の写真の中でいろんなことが考えられる。こういう目を向けたカメラマンは、ドイツ兵に対して、この死体に対してどんな気持ちを抱いたか。敵が憎くてよくもやってくれた、と思うのでしょうか。そうではない、という気がします。

2003年、私も9月にフランスからベルギーにかけて、あまり時間はなかったですから駆け足ですけど戦跡地を巡りました。広大な戦跡地という事で、お墓を探すのが大変なんですけれども、作家のキャサリン・マンズフィールドの

## 見えない戦争

弟の墓などを一生懸命、タクシーで写真やら地図やらを見せながら探しまして、ようやく墓地までは行き着いたんですけれど、それもタクシーの運転手も間違ったりなんかしましてね。それで、雨の中で記録を見るんですけれど、墓地ごとの cemetery の記録に載ってる名前がないんですよ。それで仕方がないから、一つ一つの墓標を読んでいったんです。そうすると、「……15歳」とか書いてあるわけですね。一番若いので「……14歳」となんていうものもあるんですよ。それが将校も一兵卒も同じ形のお墓です。公平に全部、並んでいて、その時、死体をイギリスに持って帰るなんていう事は全く考えられない、

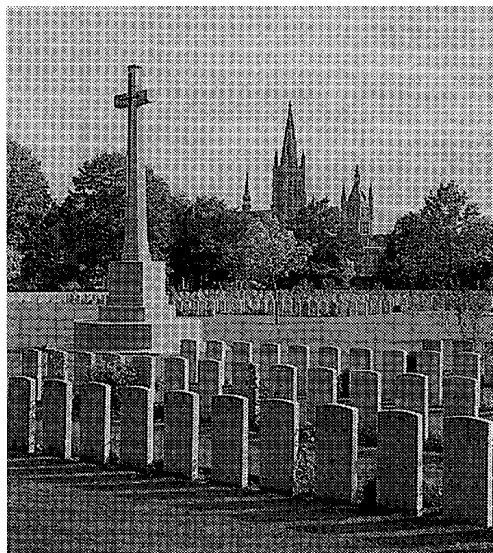


写真4

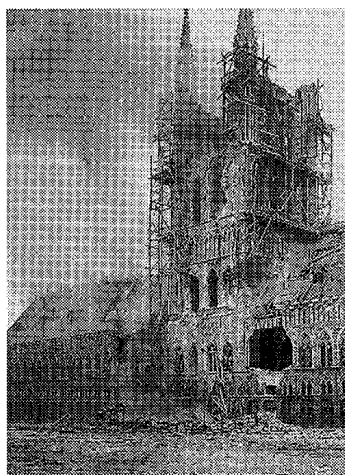


写真5

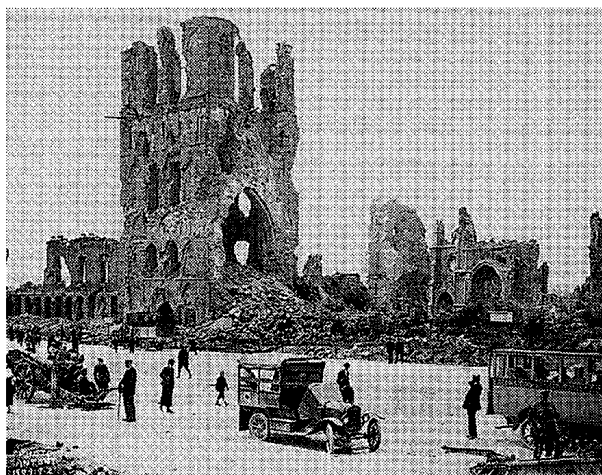


写真6

YPRES 「イーパー」

## 見えない戦争

あきらめたんですよね。お墓を作って名前がある人は恵まれているといってもいいので、無名戦士というのがものすごく多いのです。

前頁の3枚の写真は、イーパーという激戦地になったところのものです。フランスからベルギーにかけては、ソムとかイーパーとか、激戦地として有名な場所がいくつもあるんですが、そのイーパーの4番の写真は、墓地の典型的なものであって、向こうにイーパーのcathedralが見えています。とても美しい歴史のあるベルギーの大聖堂ですけど、本当に無惨に二つの塔が折れた。火事で崩れてしましまして、あとで復興したのです。今はWar Museum（戦争博物館）になっているんですけど、こういうところを歩くと、いろいろなものが見つかります。

ここに大きな凱旋門みたいなもの（写真7）がありますよね。これがメニングゲートと言いまして無名戦士の記念碑なんです。ここはとても有名だと言うだけではなくて、たとえば、或る画家が夜眠れなくてこの辺りを散歩していて、とても神秘的な体験をしました。たくさんの、なんだかがやがやする声がすると思ったら、何万と言う兵士がその門を行進していて、不思議な思いに打たれて、絵（写真8）を描いた。ロングスタッフというオーストラリア人の画家です。

またフランスのでベネという詩人が、同じような体験をしてるんですね。彼



写真7

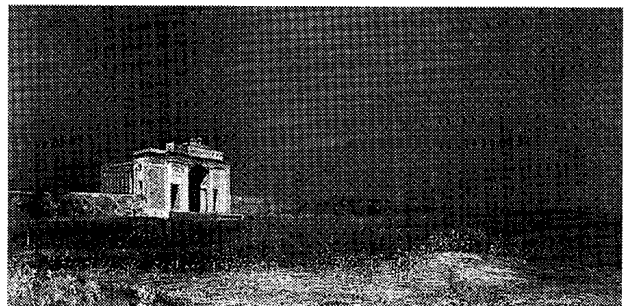


写真8

の詩の中で、

「僕は君たちが誰だか知っている。もうそんなに来ないでくれ。もう十何年もたったじゃないか。」

というような事を言うんですよ。

“I know who you are. You are from the last War.” (「この前の戦いから来たんだろ?」)

と言うと、その亡霊らしき人が、

“You, fool!” (「馬鹿者め!」) “From the next.” (「次の戦いから来たんだ。」)

と、言うんですね。そのフランスの詩人は、まだ第二次世界大戦を知らないわけですがけれども、それを予告するような恐ろしい詩です。このメニングートは、2003年に私も行きましたが、第一次世界大戦の終わった1918年から今にいたるまで、毎日、雨の日も風の日もここで“the last post”と言いまして、一日の終わりに軍隊のラッパを拭く儀式を市民が続けているんです。亡くなった何百万何千万の兵士たちの、また兵士だけではなく戦いで亡くなった人の慰霊のためにお花を捧げてラッパを吹きます。それを夜の8時に決まってやっていて、私が行った日も、続々と大勢の人が集まってくるんですね。市民も旅行者も。ですから、ヨーロッパ中の人たちが第一次世界大戦をいかに忘れていないかということです。それから、お墓を探した時に記録がなかったと言いましたけれども、ついに私は見つけることができなかつたんですよ。War Museumに行って、コンピューターで色々調べているWar Officeの資料を何とか探せないだろうかとたずねた時に、今ごろ、いろいろ訪ねてくる人がいると言うことを聞きました。どうして、戦後すぐにお墓を探さなかったか。あまりにも辛い、と。それからどこで死んでいるか分からない、というような様々な理由で探せなかつたけれど、今はコンピューター時代になって、どこ、という資料が打ち込まれているために、こんなところで戦っていたのか、という思わないところで埋まっていたりすることもある、という事で、新しくお墓が見つかったり名

## 見えない戦争

前が刻まれたりすることもあるそうなんです。

もうひとつ見えない側面を示す、こんな写真もあります。フランスのとある墓地に立つこのお墓には“Private”と書いてあります。少し赤っぽいお墓ですね。その十字架の下に、少し見えにくいかもしれませんが“shot at dawn”と書いてあるんです。“Dawn”というのは「夜明け」という意味です。「夜明けと共に撃たれる」という意味なんですけれども、この兵士はどうやって死んだのか、想像できますか？ご存知でなければ分からないかもしれない。これは、逃亡兵が味方の兵に処刑されることなんです。朝一番に並ばされて。

こういう意味のない戦いですので、戦争詩人と言われるサスーンとかオーウェンとかいう詩人は、その空しさを鮮明に描き出しています。

特にサスーンは英雄で、ストレッチャーを持って死んだ人とか負傷兵を救出に行く非常に危険な任務を先頭に立って行う将校でした。弾がものすごく飛んでくるところを救出に行くわけですから、自分が死ぬという危険が大いにあるのを指揮して、何度も何度も英雄的功績により勲章を受けている人なんですけれども、見ていて、味方も敵もとにかくむなしい、と彼は感じたのです。どん

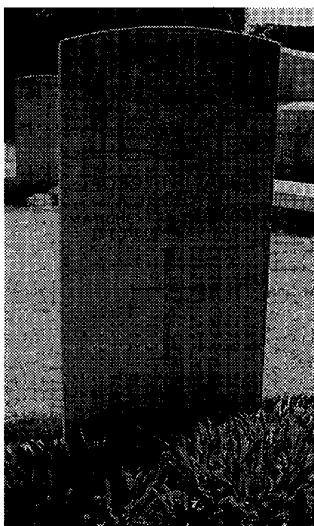


写真9 Private A. Ingham's headstone. Bailleulmont Communal Gemetry, France. The inscription on the headstone was chosen by his family.  
(photo by Masahiro Tateno)

SIEGFRIED SASSOON

**Trench Duty**

Shaken from sleep, and numbed and scarce awake,  
Out in the trench with three hours' watch to take,  
I blunder through the splashing mirk; and then  
Hear the gruff muttering voices of the men  
Crouching in cabins candle-chinked with light.  
Hark! There's the big bombardment on our right  
Rumbling and bumping; and the dark's a glare  
Of flickering horror in the sectors where  
We raid the Boche; men waiting, stiff and chilled,  
Or crawling on their bellies through the wire.  
'What? Stretcher-bearers wanted? Some one killed?'  
Five minutes ago I heard a sniper fire:  
Why did he do it? . . . Starlight overhead —  
Blank stars. I'm wide-awake; and some chap's dead.

な正義のためであれ、どんな意味があろうとも、人間がこのように家畜以下の目に合わされて、むごたらしく、ろくに戦う間もなく、飛び出したら死ぬ、という戦いを続けるべきではない、と。サスーンは、そういう事をまだ止められないのは、軍人と政治家の怠慢であると批判し、彼らがどんなに現場を知らないか、という事を訴える文章を書いたんですね。軍事裁判にかけられる事を覚悟で書いたんですが、当局は彼を精神病院へ入れました。英雄がそういう事を言う、という事になると、みんなの志気に関わると考え、国内の混乱を恐れたわけなんですけれども。

そういうときですから、一般の兵士も、塹壕戦の場において本当に空しいという思いが募っていった。自分が死ぬことの意味がわからないので、逃亡兵もあったわけですね。そういう逃亡兵を捕らえて朝、味方の兵が撃つ。お互いの気持ちも良く分かる友を撃たねばならない兵隊の気持ちはどうでしょう。この時は同じ村から行った二人が逃亡してるんです。片一方の兵士のお墓なんです



けれど、そのお父さんが、

「息子の命がこういう無駄な戦いで、しかも不名誉に殺されると言うことが耐えがたい。そしてそれを残してほしい。だからここに“shot at dawn”と刻んでくれ。」

と、主張された、という話が残っています。これは、そういうお墓です。

写真10は、病院のベッドの中の女の子で、戦争には出かけていない、ベルギーかフランスの子供でしょうか。人形みたいな布で作ったものを持って、どういう怪我をしているのか、ぐるっと頭を包帯で巻いています。この子の大きな目を見ていると、その背後にある悲劇が想像されて、耐えがたいような気がします。

次に写真11ですが、これはドイツ人の墓地です。イギリス人やオーストラリア人、アイルランド人、カナダ人、インド人、いろんなどころから来ています。オーストラリアだってカナダだって、ものすごくたくさんの死者を出しているわけですね。ドイツ人の墓地もたくさんあります。ドイツ人のお墓は大抵、



写真10 少女

Käthe Kollwrtz 'The Mourning Parents',  
valdslo, Belgium



写真11 ドイツ人墓地の彫刻  
ケーテ・コルヴィッツ作「嘆きの両親」

森の中にあるんですけれどね。ベルギー人が提供したくなかったっていうのもあると思います。深い森の中の、そうしたドイツ人の墓地に、一つの彫刻があります。この彫像を作ったのは有名な女性なんですけれども、これは亡くなった兵士の両親の像なんです。「嘆きの両親」と呼ばれています。母親の像、つまり、うなだれている方の女性の髪はありません。つるっとしているんですけれど、この頭の後ろっていうのは彫刻家自身の頭です。その女性の、というか両親の像が向いている先には彼女の次男が眠っています。子供が眠っていることと、ドイツがこの戦いをしたことの複雑な思いから、彼女はなんとか彫像を作りたいと思ったけれども、作るまでに何十年とかかりました。途中で像が壊れたりしたこともあるとか、そういう曰くつきのものなんです。

さて、もう一度、写真3（次頁に再録）をご覧ください。塹壕戦で亡くなった兵士の遺体をストレッチャーに乗せて運んでいくところを、同僚の兵士たちが、まさに塹壕の中に立って見送っている光景です。見たら分かるように、あたりには一木一草もない。そしてどこへ行こうにも穴だらけで、容易に前へ進んでいけないと言うように、ベルギーやフランスの国土がむちゃくちゃになっているという情景です。ドイツからロシアにかけても、同じような状況がありました。

一方、当時にも写真12-14のような、イギリスのいわゆるイングリッシュ・ガーデンの発祥の地と言われる邸宅の庭園があります。サックヴィル・ウェストと言う貴族の作家でもある女性とその主人、ニコルソンと言う人が一生懸命、彼らの美意識と発想力を駆使して作って、それがイングリッシュ・ガーデンの最初だと言われる。ナポレオン戦争や中世に遡るような、そういう塔とか古い塀とか、広大な土地の中に古代ローマを思わせるような彫像が立っていたり、様々な美しい花がアレンジされている。それは、自然の草花とともにあり、その美しさを愛する英国人の美意識、文化の姿でもある。こういうイギリスという国を守るために、私たちの信じている価値観、正義を守るために戦うっていうのが彼らの根底にあって、それは、本土のイギリス人に限られたことでは

見えない戦争



写真3

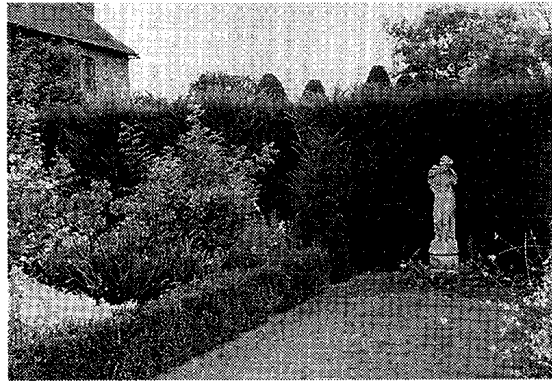


写真12

イーパー

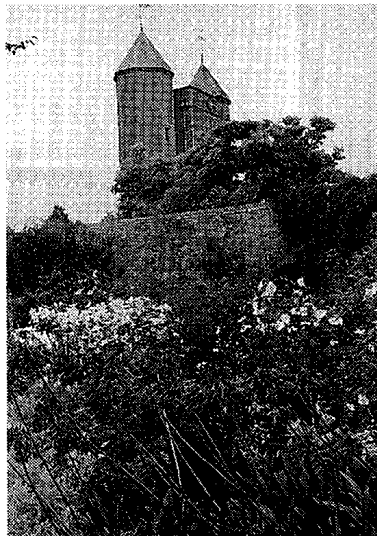


写真13

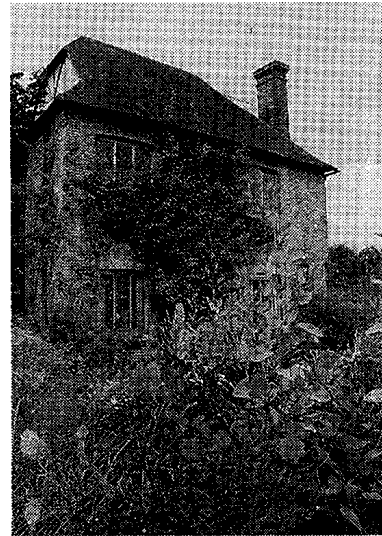


写真14

シシングハーストの庭  
(サックヴィル・ウエスト)

なかったのです。アイルランドのシェーマス・ヒーニーと言う詩人、ノーベル賞詩人が、今も活躍していますけれども、ヒーニーの詩によりますと、アイルランドの人たちは当時、独立したかったわけですから、イングランドが参っている時はアイルランドにとっては独立の絶好の好機だ、と言って戦争なんかには協力すべきではない、と言ったアイルランド人もいたわけですね。けれども、自分たちの責任を果たさないわけにはいかない。つまり、ドイツは中立で不可侵なはずのベルギーを侵して正義を、民主主義を侵しているのに、私達が信じているものを一生懸命、血を流してイギリス人だけに守らせておいてアイルランド人が文句を言うことはできない、と行って参戦に志願していったアイルラ

見えない戦争

ンド人もいると言うんですよ。彼らのことも忘れるべきではない、とヒーニーは言っています。そういう人たちの事は、いまだにアイルランドの中では賛否両論あるんです。或るアイルランドの詩人が実際、戦争で死んでいるんですけども、若くして死んだ彼の詩を見ると、一度、怪我かなんかでイギリスの中を列車で帰って来る時の情景がうたわれています。それから又、出て行って死ぬんですけど。彼は、こううたっています。イギリスの美しい大地の中を汽車で帰ってくる。もし私がアイルランド人でなかったら、まさにこのイギリスを守るために戦いたいと思うであろう、と。

そういうことがありまして、次に見ていただきたい3枚ほどの写真があります。いずれも、イギリス南西部の西の突端にあるコーンウォール地方の海辺の写真です。「ランズ・エンド」とは「地の果て」という意味で、その西にはた

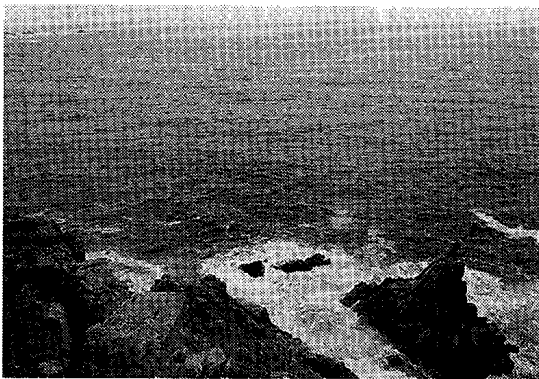


写真15 ランズ・エンド

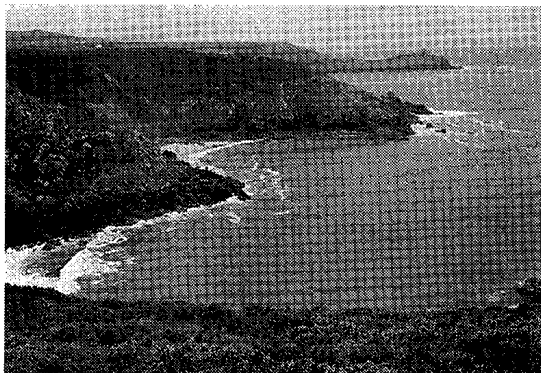


写真16 ゼノー

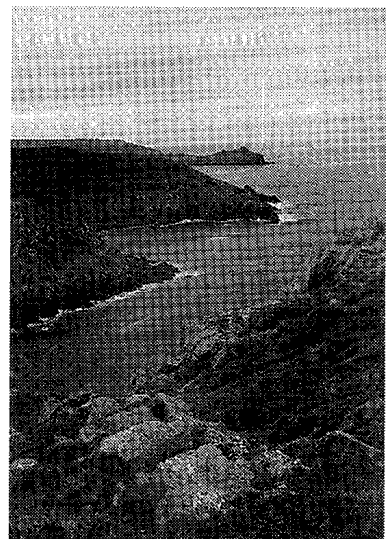


写真17 ゼノー

コーンウォール

だ大西洋が広がるのみ、その彼方にはアメリカ大陸がある筈です。他の2枚はゼノーという辺鄙な村の、やはり風吹きすさぶ地の果てのような、しかし息づまるほど美しい海岸線の写真です。これから、第一次世界大戦中、このゼノーに滞在したD.H.ロレンスというイギリスの20世紀の作家についてお話します。これは偉大な作家で、E.M.フォスターなんていう、その批評眼においても信頼されている20世紀の作家などは、ロレンスを「20世紀唯一の予言的な作家である。」と言う風に評した。予言的な作家と言うと、ドストエフキーとかメルヴィルとか非常に限られた人しかいない。予言とは、つまり“song (うた)”が聞こえてくるような文学だと、フォスターは言います。理屈を超えたものが聞こえてくる。その理屈を超えたものが、人の悲しみとか悲劇とか、たとえば刑務所なら刑務所で死刑に遭う女性の、その死刑にあうのを待っていると言う部屋の中だけの悲しみではなくて、ドストエフスキーの小説のように、宇宙全体が震える、という歌を聞かせてくれる、それが予言的な作家だと、フォスターは言うのです。そして彼は、ロレンスがその「予言的な作家」である、と言ったのです。

ロレンスは第一次世界大戦中に何をしていたかと言いますと、彼は結核でもあったんですけれども、その当時は胸がちょっとへんだというくらいで検査を受けるといつも失格なんですけれども、戦ってはいないんです。しかし、イギリスで戦場ではないところで戦った、と。これが私の言いたい「見えない戦争」ということで、その意味を彼は追求したと思うんです。つまり、見える部分だけが戦争ではなくて、私がここにお見せしているどの写真にしても、ばんばん撃ちあっている写真ではないんですね。でも見えない部分に、私たちは、より本質に迫る部分を見ることが出来る。今の私たちにしても比較的、平和ですけれども、ロレンスはイギリス本土に残った人達、戦い前後の人達、戦っていない人達の生活の中にもっと本質的な戦いがある、ということと言わんとした。

ロレンスの小説はどのようなものがあるか、と言いますと、1913年には、エディプス・コンプレックス的小説としても知られる半自叙伝的名著 *Sons and*

*Lovers* (『息子と恋人』) が出版されています。文明の都市化と社会の流動化、教育が階級を超えて上昇志向を生み出す一方、古い生き方や本能を否定する傾向も顕著になった世の中で、価値観の対立する両親のあいだで育つ若者が、母親との強いきづなのために女友達との関係に苦しむという物語で、ここには、たんに「性」の問題だけではない、現代文明、産業主義文明によって抑圧される「人間」の本能の問題があります。そして、1914年に第一次世界大戦が始まります。1915年に小説 *The Rainbow* (『虹』) の出版と発禁回収廃棄処分。これは非常に美しい、三世代に渡るイギリスの歴史を描いた小説です。しかし、出版直後、発禁処分になって、回収されて直ちに廃棄処分になってしまったんです。その時、すでに第一次世界大戦がはじまっていたね。「裸」の言及が出てきたりして、ポルノグラフィックだからだという風には言われているんですけども、今読むとポルノとはまるで考えられないんですね。しかし、その中には、やや反戦的な部分もある。軍人に対して恋人が、

「あなたは、なぜ軍人なんかをやっているの？」

と、尋ねると、

「大勢の人たちの幸福・安全を守るためだ。それは意味がある。」

と、彼は答える。しかし、

「大勢の人たちの幸福って何なの？」

と、問われたとき、彼にはその中身が答えられない。

「でも、とにかく守ることがないと幸福はないだろう？」

こういう論議が出て来るんですね。それと、やっぱり戦争中に、官能的な性とか情念とか、心身ともに震えるような感動を与えるなんていうのは好ましくなかったのかもしれないですけども。このロレンスの小説に裁きを下した裁判官は、実際、つい最近、自分の長男が戦争で亡くなったという人なんですよね。弁護士も、作家であるロレンス自身も呼ばれないという裁判で、出版社は当局の怒りに触れたくないから、「どうぞどうぞ、進んで回収します。」という具合でした。出版されて回収されたと言う事は、

“It’s the end of my writing for England.” —「イギリスでは出版できない、どこの出版社も引き受けくれない。」 —（意識）

という事です。でも彼は書き続けます。

お金がないから乞食同然の生活をして、いつまで、もつだろうと言う感じです。友人たちの厚意にすがりながら、転々とするような生活の中で、コーンウォールというイギリス南部の一番西の端、西を向けば大西洋しかないというような僻地の、本当に荒涼たるところに行きました。彼がいたゼノーという村の付近の海岸は、今、ナショナル・トラストになっているくらい美しいところです。その海岸沿いを私も2002年の夏、訪れて本当に心を打たれて、翌年もまた行って、一日に5時間くらい歩きましたけれども、ずっと海岸線が続いていますから人っ子一人会わなかったりするんですね。そういうところです。そこで、ドイツ人の妻と暮らしました。奥さんのフリーダという人はドイツの貴族の娘なんですが、英国のノッティンガム大学の教授と結婚していて子供もあつた。それでもロレンスと駆け落ちをした女性です。それでロレンスはスパイ扱いされます。とうとう、最後はコーンウォールから追い立てられます。そういう状況の中で、彼は書き続けていた。多くのエッセイ、文明批判、歴史観、文学論、そして出版の見込みのない小説 *Women in Love* (『恋する女たち』) を書きついでいたのです。

ロレンスの戦いは何だったのか、という事を『恋する女たち』という、この彼の代表作の中で考えてみたいと思います。(代表作と言えば「虹」もそうだし、よく知られているのは「チャタレイ夫人の恋人」だと思えますけれども。他にも名作は、いろいろあります。『息子と恋人』もすばらしいですし。)『恋する女たち』は、*Women in Love* という題名からわかるように、一見すると恋愛小説なんですね。一言も戦争の事はでてこないんです。けれどもロレンスは、出版される当てのないこの小説を、繰り返し嫌がらせのためとしか思われないような徴兵検査、屈辱的な身体検査をされては「だめだ」と返されるような状況の中で書いていた。そして、近所の目はスパイではないか、とロレンス

を疑い、彼が出版社に送るエッセイは片っ端から送り返されてくるという中で書き続けていた。そしてイングランドを批判しながら、まさに愛しているわけで、文明というものの最後を考えていたのです。彼が、どんな事を考えたのだろうか、というのを考えながら読むと、戦争を意識していること、戦争をその背後に語っているな、という事が感じられると思います。

少し、最初のところを読んでみましょう。第一章、「姉妹」。主人公の姉妹です。

ブラングウェン家の姉妹のアーシュラとグドルーンが、ある朝ベルドーバーにある家の、張り出し窓のところで仕事をしながら話し合っていた。

とあり、結婚の話をするんですね。

「アーシュラ、ほんとに結婚したいと思わないの？」

アーシュラは刺繍をおいて顔をあげて、

「分からないわ。」

と答えた。

「意味のとりようによるから。」

グドルーンは少し虚を突かれ、ちょっとの間、姉を見つめた。

「そうねえ。」

と、グドルーンは皮肉な調子で言った。

「普通その意味は決まっているんだけど。でも、とにかくあなたはこう考えない？」

と彼女は少し暗い顔で言った。

「結婚すれば少しはましになるだろうって。」

アーシュラの顔は曇った。

「そうなるかもしれないわ。」

と、彼女は言った。



「でもはっきりしたことは言えないわ。」

グドルーンは、また少し苛々して言葉に詰まった。彼女ははっきり言ってしまいたかった。

「あなたは、結婚というのは試してみないとわからないことがあると思わない？」

「結婚を一つの経験として見なければならぬというの？」

と、アーシュラは答えた。

「とにかく、それは余儀なくそうなるのよ。」

と、グドルーンは冷やかに答えた。

「避けられるものならば避けたいものだけけれど、結局はある種の経験ということになってしまうのよ。」

「本当は、そうなりはしないわ……」

と、アーシュラは言った。

「経験の終点になる、というのが真相らしいわ。」

こういう風に結婚の事を言っているんですね。これは20世紀の始め頃なんです。ものすごく現代的というか、クールと言うか、否定的な結婚についての論議ですね。

「もちろん、そういうことも考えのうちに入っているわ。」

とか言います。

「いい申し込みがあっても考えないの？」

と、グドルーンが畳み掛けると、

「今まで何度も断ったことがある。」

と、アーシュラは答えます。

「本当なの？」

と、グドルーンはビックリするんですね。

「年収1000ポンドで、とてもいい人だったわ。とても気に入ってたんだけど。」

「本当？でも誘惑に負けそうにならなかった？」

「観念的にはね。でも現実的には負けなかったわ。」

と、アーシュラは言った。

「話が肝心のことになると、誘惑に負けるどころではないもの。誘惑されるということでもあれば、あっという間に結婚してしまうわ。私は結婚したくない方に誘惑されたのよ。」

そこで、二人とも明るい顔になった、と書いてあるんですけども、

「驚くような話ね。結婚しないでいたいという誘惑がそんなに強いとはね。」

とって笑うんですけど、

その話は二人をひやりとさせた。

と、あります。それから、しばらくたって、二人は26歳と25歳と言うことで一人前の女である、というようなことが書かれています。一方はロンドンで芸術家になるために勉強してきたというので、アトリエ生活なんかもして、非常に進んでいるというか前衛的な暮らし方を知っているということなんですけれども、

「このところ男が近づいてくるのを待っているんだわ。」

なんて事を言います。どちらも、なかなか魅力的な女性なんですけれども。

グドルーンは、突然下唇をかみ、半ばずるそうに半ば悩ましげに笑みを浮かべ、奇妙なしかめ面をした。アーシュラははっとした。

「そうするとあなたは、家に帰って来て、ここで男性を見つけようとしているわけ？」

姉妹の家というのは、ノッティンガムの近くのロレンスが生まれた炭鉱町をモデルにしたところにあると考えられます。ロレンスは、炭鉱夫の息子として生まれたという労働者階級の出身ですが、お母さんは中流階級の出と断言していますね。教育を受けている。そういう両親の間に生まれているんです。その辺りの炭鉱町という、決して美しくない、醜いものだらけ、と言うところに帰って来たグドルーンに向かってアーシュラは、

「ここで男性を見つけようとしているわけ？」

と、聞き返します。

「あら、私はこちらから出かけて行って誰かを探そうとは思っていないわ。でも、もし偶然にとっても魅力ある人で十分資力のある人が来たら…」

結婚したい、と言うことを匂わせるんですね。

「ねえ、飽き飽きしてこない？ 物事が実を結ばずじまいになると思わない？」

「実を結ぶものなんて一つもない。」これは、結婚のことだけをさしているのではないんですね。そして、

「何もかもつぼみのままでしぼんでしまうとしたら…」

「何がつぼみのままでしぼむって言うの？」と、アーシュラは問うんですけども、たとえばフランダースフィールドに立ってみると15歳、14歳あるいは18歳、19歳でもですね、ここで死んでいった若者の事を思うと、つぼみのままで死んでいますよね。人生というもののどんな可能性があったか判らないんですけども、その兵隊たちではなくって現代に生きている私達女性も、何もかもつぼみのままでしぼんでしまうとしたら、どうでしょう。

「あらなんでもよ、自分自身も、あらゆる者がよ。」

と、グドルーンは答えます。その辺で、二人とも漠然と自分自身の運命を考えていた。この「運命」(“Fate”)という言葉は、第一次世界大戦をめぐるよく出てくる言葉なんですね。

やがて、ちょっと面白いところが出てくるんですけども、

「毎晩だんなさんは家に帰って来ると、『ただいま。』と言ってキスして…。」

しばらく沈黙が続いた。

「そうねえ。」と、グドルーンが困ったような声で言った。

「とてもだめねえ。男と言うものを考えると、とてもだめねえ。」

と、言うんですね。決まったように毎晩同じ人が帰って来てキスをして、それを想像しただけで、本当に充足感というか、充実というか、自己実現のない生活のイメージになってしまっている。ちょっと保守的な、あるいは19世紀イギリス中流社会の典型的な結婚、家族を大切にする考え方からすると、驚くべき結婚のイメージです。

## 見えない戦争

そういう結婚というものは、社会とその価値観の一つの象徴でもあると思うんですけれども。さて、ついでに触れておきたいのですが、これだけ見て戦争ということは思わないでしょうけれども、ロレンスが書いているものの中には戦争に言及してるものも当然あるわけです。ロレンスの短編集の中に *England, My England* 「ああ私のイギリスよ」とでも言いますか、「イギリスよ、わがイギリスよ」というのがあるんですけれども、これは伊藤整の訳がありますが、なかなか現在では手に入らないですね、絶版になっています。その表題となった短編を含む『ロレンス短編集』というのは上田和夫の訳で新潮社から出てまして、これは最寄の本屋で買えると思います。この物語では、理想的なロマンティックな結婚をする男女が出てくるんですね。ロンドンから離れた自然の中で、自分たちの情熱とロマンの世界の中に、夢の中に、あるいはイギリスの過去の中に生きられるような生活をする男女なんです。

彼の方はもちろん素人、生まれながらの素人だった。

とあって畑を耕すんですけれども、

骨を折って耕したわりには成果はほとんど上がりず彼のやったもので長持ちたものは殆どなかった。庭に段々を作るのにしても、細長い2枚の板で土を支えるのだが。

なんていうと私は塹壕の事を連想してしまうんです。

やがて背後から来る圧力で板はたわみ始め、それが腐りきって破れ、土が一塊となって再び川床へ、みんな滑り落ちるまでには、それほどの年月を必要としなかった。

## 見えない戦争

第一次世界大戦では、一日でやられてしまいますよね。だから始終補強していったんですけれども。

だが、そこに問題があった。彼は何事にも真剣に取り組むようには育てられていなかったし、自分でもそれでいいのだと思っていた。

これは、現代の若者だと思っても読めると思うんです。

実際、彼はほんのちょっとした間に合わせの工夫のほか何もする事はないと考えているのだが、そのくせ、今に続くその古い田舎家や、在りし日のイギリスの今に続く古い物に、すごく熱中しているのだ。

ロマンティストですね。

現代のものには全く素人くさくて大雑把なのに、過去の永続性の観念にこれほどとらわれているとは奇妙だ。ウィヌフレッドは、[若妻ですけれども]彼を批判できなかつた。都会育ちの彼女にとって、あらゆるものが素晴らしく、土を掘ったりシャベルですくったりすることさえロマンティックに思われた。だが、エグバートにも彼女にも、仕事とロマンスとの違いが、まだ、はっきりと分かっていなかった。

ところが彼女の父親のゴッドフリー・マーシャルというのは、とてもたくましい企業家なんです。彼の生き方は、エグバートの人生観とは違うようなんですけれども、それでも若い二人の自由で楽しいバラのような生き方を認めている。エグバートも、お父さんの成し遂げたいろんなことも素晴らしいと思っている。

## 見えない戦争

若い二人の間に白熱する肉体的な情熱にもお父さんは満足していた。ロンドンで余り多くない資産をしっかりと守るために、今も健康で賢明に働いている男にとって、淡くかすんで見える大丘陵地帯に近い共有地や湿地に深く埋もれたクロッカム・コテージで、この若い二人がせっせと土を掘り続け、互いに愛し合っている事は、まるで生きたロマンスの一生のような思いがした。

ということで、守っていきれているという状態なんですね。お父さんのほうは、

父親にもそれなりの不安があったかもしれないが、それを一人胸にしまっていた。おそらく彼は、この人間世界を、我々がこれほど力を尽くして入念に作り上げながら結局は自分たちの死にいたるために苦心したに過ぎないこの社会を、それほど深く信じていなかった。しかしゴッドフリー・マーシャルは不屈で粗野な性格だったが、それを切り抜ける健康な老獺さがないわけではなかった。彼にとって、問題はあくまで勝ち抜くことであり…

勝つことだけが重要、というのは戦争に似ていますね。

後は一切を天にゆだねた。それほど多くの幻想に恵まれていたわけではないが、彼は今なお天を深く信じていた。ひそかに、且つ無条件に、彼は一種の信仰を抱いていた。ある根絶やしできない、木の樹液のような苦い信仰、樹液のように盲目的で苦い信仰は、確かに盲目的で苦いが、それでも絶えず成長し、断固として進み続ける。おそらく彼は恥知らずなのだろうが、ただ伸びようとする木は恥知らずで、他の樹木が茂るジャングルの中を、一筋に突き進んで行くのである。結局、人間を前進させるものは、このたくましい樹液のような信仰だけである。こうした信仰をもつ人は、自

分のために建設した社会制度という隠れ家の中で、[これはちょうど塹壕のようなものかもしれないですけど] 何代にも渡って生き続けることができるだろう。梨の木やすぐりの茂みが塹で覆われた庭の中で、たとえ人類が突然絶滅しても、幾シーズンもの間、実を結び続けるように。だが塹で囲われた庭の果樹は、自分たちを保護してくれる塹そのものを次第に少しずつ壊していく。どんな制度にしても、生きている人たちの手によって絶えず更新されるか修復されない限り、少しずつ崩壊して行くのである。

社会制度というものを絶えず生きたものにするというか、守れるようなものにしていかない限り、そこで隠れて生きるという事は、だんだん、できなくなるということなんですよ。その修復作業を一生懸命やっているのが、お父さんなんです。責任感が強くてですね。一家を支えていく柱になっているわけですね。

エグバートは、この修復したり更新したりする仕事を、もう、する気にはなれなかった。彼はこの事実に気がついていなかった。しかし気がついたところでどうせ大して役に立たなかった。彼はただ出来なただけなのだ。彼は古い立派な血統の、禁欲的で、しかも享樂的な性質だった。貴族的というか。しかし彼の義父はエグバートと同じく決して愚かではなかったが、このようにあるからには生きるのが当然だと悟っていた。そこで彼は社会的な仕事の彼自身の小さい分野に打ち込み、家族のために全力を尽くし、後は天の究極の意志に委ねた。死のもつ、あるたくましさの故に彼は前進することができた。しかしその彼にして時には、この世の中とその仕組みに対し、苦い想いをいきなり噴出させることもあった。それでも彼には彼なりの成功の意志があり、それが彼を駆り立てていた。成功してどうなるかは彼自身も考えていなかった。成功したからこそハンプシャーの家をもち、子供達は何一つ不自由なものはなく、彼自身も世間ではかなり



重要な存在になっている。

子供達はそういうお父さんの本質的な部分の意味に抵抗、反抗するので自由を求めたわけです。

けれど、自由で純粋な夢をもつエグバード夫婦の間に子供が生まれて、その子供が、うっかりした若いお父さんがそこらへんに投げておいた鎌につまずいて転んで膝を深く切られまして、その傷が悪化して片足を失いかけます。この、子供が負傷して叫んでいるときの対応は、お母さんはもう青ざめて、どうしたらいいのかっていう。お父さんのほうは、大丈夫だよ、大丈夫だよと、本当は不安なんですけど、大丈夫だよって言うにすぎません。「呼んで来てちょうだい！」って妻が言うから、そうかっていう感じで医者呼んで来て、ただ、おろおろしている。すると医者は、「あー、お嬢ちゃん良い子だね、良い子だね。」なんて言いながら薬を塗ってくれて、で、「大丈夫だよ、静かにしてればね。」って帰っていくと。でも、やっぱりなんか痛いし、なんかよくなってないようだしっていうことを何回か繰り返す。

「あー、確かにねー。」

と、気楽で口数の多い医者は膝に薬を塗り包帯をして、子供に寝ていることと軽い食事を取ることをすすめた。

「一、二週間で治るだろう、骨も靭帯も傷ついてない。幸いにも肉が切れただけだ。一、二日したらまた来てみよう。」

ということを繰り返して二週間して。その間にどんどん病状が悪化して、傷は表の方は良くなってきてるようだけど、ひどく痛がっている。すっかり治っているようには見えない。

奥さんが、

「私、ジョイスの膝がちゃんと治りかけているようには思えないんだけど」

と言うと、

「治りかけているようだが」

と、彼は言った。

「大丈夫だと思うよ。」

「もう一度、先生に見て頂きたいの。どうしても納得できなくて。」

「君は実際よりも悪いほうに考えようとしているんじゃないかね。」

という調子なんです。でも、どうしても不安でたまらないということで、ウィニフレッドは自分のお父さんを今度は呼んできた。すると、お父さんは早速、「お前が納得できないのなら、呼ぶべきだ。」ということで医者を呼んで、これはどうもおかしいというので、それでも納得できないのなら町の医者と呼ぼう、という風にどんどん、ことを運んで手術することになる。しかし、手術しても、本当に足が助かるかどうかわからない、というような事態になる。

そのなかで、夫は父親としての、その責任を果たせない。父親として失墜していくわけです。子供達はお父さんが大好きなんです。なぜなら、自由というもののシンボルみたいな人で、美しい声はテノールだし、バラのような純粹な人だし、誰が聞いても話し方が魅力的だと。自分達に天国みたいに思う存分好きなことをさせてくれる。お母さんの母親としての權威をふるおうとすることを、ことごとくお父さんが打ち砕いてしまう。だから、責任を持って子供を教育しようというふうに懸命になればなるほど、奥さんは、自分のやろうとすることをひっくり返す敵として夫のことを見るようになっていく。初めは彼女もロマンティックな夢をみて、父親の産業主義的、企業家的発想に反旗を翻して、そうではない、なんでも手作りのもの、手作りの生活、自然の中の暮らし、そして二人の情熱、とっていたんですけど、娘の事故を機に、ウィニフレッドはお父さんのほうの陣営に舞いもどってしまうことになった。そして、

そこからはじき出されてしまった夫の存在は、ほとんどウィニフレッドにとって苦痛に近かった。彼のいないことを心から願った。しかし、本当にいないってことは死ぬってことなんです。

それで、先程の『恋する女達』という小説の中の姉妹のやりとりを見ますと、

「男の存在っていうのは、それが困るわね。」

っていうのはいかにも冷たいんですけど。如何様にもとれますけど。どうでしょうか。このあいまいさに比べると、短篇の方は夫の存在が具体的でずっと鮮明です。

だんだんあの夫の眉間の間の小さい縦皺、顔にしばしば表れるあのひらめくような意地の悪いような微笑、分けても意気軒昂とした孤立というあのイシュマエルの性質。それにまるでシンボルのように直立するあのしなやかな肉体。まるで直立する生命の象徴。彼が生きている肉体が静かに知らぬ間に彼女のしおれた魂と向き合っ立っているだけで、彼女にとってはまるで拷問であった。

しおれた魂というのは、先程の、つぼみが生きてままだしおれていくというイメージに対応しています。彼女は夫が死ななくても、いなくなっても、そのかつての夫との魂の震えるような、情熱の燃え上がるような関係を失ってしまいます。その上、新婚当時の二人は、大好きな、中世以来の魂が宿っているようなイングランドの最も古い地域の自然の中の古い民家に暮らしていたはずだったんですね。ところが彼女は、そういう風に夫を否定する自己犠牲と責任感の塊みたいになって、必死に町へ行って娘の看病をして付き添って、もうそれだけの毎日の中で自己というものを殺していくわけなんですけれども。そういう彼女の中のしおれた魂に対して、あくまでそういうことに屈服しないでい

る夫のしなやかな肉体。直立する、生命のしなやかな、生命の特徴のように生きてくる肉体そのもの、それが夫なのです。彼女は、その夫に対する愛は失ってないわけなんです。やはり魅力的なんです。でもその魅力的な彼の肉体が目の前に立つと、自分にとっては、彼女にとっては拷問のような苦痛であったという風に描かれていきます。だんだん彼女は、彼に身近にいられることに耐えられなくなり、

「彼がシャツ一枚で動き回り子供達にあのテノールのしわがれ声で話し掛けられたりすると彼女は怖気だった。」

なんていうことになります。それでとうとういる場がなくなってくるんですけど、そこへ大戦が勃発した。

彼は墮落できない人間だった。自分を粗末にできなかった。彼は生粋のイギリス人らしいイギリス人で、敵意を燃やしたくても彼には出来なかった。だから戦争が起きたとき彼は心のそこから、それに、戦争に反対した。彼には外国人を負かそうとか、殺す手伝いをしようという気持ちがこれっぽっちもなかった。彼には大英帝国という概念は全くなく、[この背景には軍事だけでなく、当然、産業、植民地政策、みんなあるんですけども、] ルール・ブリタニアなど、彼にとってとんだお笑いごとだった。彼は血統からして完全に純血種のイギリス人であったから、本来の気持ちからして、バラがバラであるが故に侵略的でないように、イギリス人であるが故に侵略的でありえなかったのである。実際、彼にはドイツを侮りイギリスを称揚する気など全くなかった。ドイツとイギリスとの相違は善と悪との相違ではなかった。それは青い水草と茂みに咲く赤か白の花の相違である。それだけの相違にすぎないのだ。野生のイノシシと野生の熊との相違。しかも、人間の良し悪しは個人の性格によるのであって国民性による

## 見えない戦争

ものではない。エグバードは育ちが良くこんなことは生まれながらにして身につけていた。ある国民を一まとめにして憎悪するなど、彼にとって全く不自然なものであった。ある個人を彼は嫌い、ある個人を好むことがあっても、大衆については何も知らない。ある行為を嫌い、ある行為は自然に思われたが、大半の行為については彼は何ら特別な感情をもたなかった。だが、彼には、ただ一つ最も深い純血の本能があった。

これは、先程の「孤立」という事だと思いますけど。

彼は、自分の感情が大衆の感情によっておしつけられないように、必然的に身をよけた。彼の感情は彼自身のものであり、彼の理解力は彼自身のものであって、そのいずれをも進んで裏切る気はなかった。群集が求めるからといって、自分の真の知識や自分自身までをもふくめて良いものだろうか。

と、言いながら、だんだんその戦争に行くしかないという風になってきます。

それにしても戦争だ。戦争だ。まさに戦争だ。正邪に関わりなく戦争そのものだ。彼を躊躇させたのは、他人の支配と民主的軍隊の暴徒的精神の支配のもとに身を捧げることであった。彼は身を捧げるべきか、精神において劣っているとはっきり解っている者の手に自分の生命と体を引き渡すべきだろうか。自分より劣ったものの支配下に身をまかせるべきだろうか。それが当然だろうか。

という風に、下士官などについて、そのようなことが書いてあるのですが、

彼は服従するつもりだった。けちなごろつきのような下士官たち、そして

士官達にもこき使われるつもりだった。生まれながら自由にして育った彼が、一体そうすべきだろうか。

と、問いながら、最後はもう自分のいる場がなくなってしまうと、全てが嫌になってくるんです。それで少しずつ、最期の審判のように知る必要が迫ってきたような気がして、フランダースに出かけて行きます。志願するのです。

そして夏の終わりには、彼はフランドル地方に行き戦闘に参加した。  
[イーパーなんかのあるところですね。] 彼はすでに生活から抜け出し生活の及ばないところへ行ってしまったようだった。まるで高いところから飛び降りようとして、ただ降りなくてはいけないところしか目に入らぬ人のように、彼はもはやこれまでの生活をほとんど思い出すことがなかった。

妻に言ってもですね。イライラしたような表情で、あなた三人も子供があるんだけれども、それを残して行くということは考えたんでしょうね？って言われるだけ。で、お父さんに相談したら？っていうわけで、妻のお父さんに相談したら、それも渋い顔をして、

「まあ君にできることと云ったら、それしかないだろうな。」

って言われてしまう。それで行くのです。何回か、ケガをして戦場を離れることもあるんですけど、結局、最後は死ぬわけです。弾丸が当たるといって、だんだん最期の審判のようにして、それ知る必要が迫ってきた。

彼は頭を打たれたのだ。最初は漠然とした推測にすぎなかった。だが、苦痛の振り子が揺れていくうちに、次第に、しだいにそれが揺れながら近づき意識の苦痛と苦痛の意識へ彼を導き、徐々に認識があらわれてき

た。俺は頭を打たれたに違いない。

という風に感じてきます。

おお死よ、死よ、世界は血にまみれ血は死の苦痛で身もだえしている。魂は暗黒の海、血の海を漂っているごく小さな光のようだ。そしてその光は風のない嵐の中でちらつき鼓動し脈打ち、消えればいいと願いながら、消えることがない。かつては生活があった。かつてウニフレッドと子供達がいた。だが、記憶の藁に、過去の生活の藁にすがろうとするはかない死の苦しみを、努力はあまりにもひどい吐き気をもたらした。いやいや、ウニフレッドもいなかった。子供達もいなかった。世界もなかった。人々もいなかったのだ。消滅の苦しみのほうが、後退する吐き気よりもよっぽどまだ。

過去の栄光とか過去の愛情、過去の素晴らしい生活とか、愛したもののとか、そういうものにしがみつきながら、死んでいくという。しかしそのイメージそのものは吐き気の対象でしかないというんです。それよりは自分が消滅していくほうがましだというような心境になっていくのです。

全く、全く忘れること、生命の核心とその構成単位を破壊し、大いなる暗黒をゆっくり流れていくこと。

このとき彼は大量の死んでいった人たちの魂が、一つの黒い死の海に流れ込んでいくというのを実感しているのです。

ただそれだけだ。手がかりを断ち切り、後退も前進もなく、ただ一つの暗黒と入り混じり混じれ合うこと。黒い死の海に未来の問題を解決させよ

う。人間の意志を碎き放棄させよう。あれはなんだ。光だ。すごい光だ。あれはなんだ、人の姿か。あれは彼の頭の上にある巨大なウマの脚か。大きな、大きな。

ドイツ兵達はかすかな物音を耳にして、ぎょっとした。それから照明弾のきらきらする光の中で砲弾によって跳ね上げられた土の山の傍に、彼らは死んだ男の顔を見た。

ちょうど最初に見ていただいた写真のドイツ兵と逆の立場ですね。ドイツ兵が死んだ男の顔を見たという、イギリス兵の顔を見ているというところで終わっているわけです。ロレンスは、そういう小説、短編も書いてます。

それで、『恋する女達』のテキストに戻りますけれども、ここにもウマの話がちょっと出てきます。姉妹が待っているところにジェラルド・クリッチ（クライチとも言います）という颯爽たる、これは炭鉱の持ち主の息子で、会社経営を非常に産業的、効率的に果たしたやり手の、そして肉体もたくましい、男らしい男です。女達が憧れるような、という風に描かれている。もちろんお金もたくさんあるしっていうので、グドルーンが求めていた資力も充分にあって、なかなかいい男だったみたいなんですね。けれど、彼は、そのお父さんの死を見つめながら、なぜか自分の内面の一番、弱いところを破壊されて「泡」のような自分しか残らないという恐怖にとりつかれます。彼の場合も、お父さんがもともと炭鉱主で自分達を守ってくれた。そのジェラルドの父親について、そして父と子の関係について、ちょっと考えてみる必要があります。

ジェラルドの父親の場合、エグバートの義父と同じではないですけど。同じく寛大な実業家でありながら、いわば表面的には、よりロマンティスト、理想主義者、博愛主義者、キリスト教的な愛の精神に満ちた父親だったんです。しかし、だんだん炭坑のストライキとか労働運動とか起こってきた。あるいは、その起こってくる背景には、やはり貧富の問題がある。それから労働の搾取というか、産業革命がどんどん進んできて炭鉱経営もかつてのように手堀で、そ



してロバが引っ張ってというのではなくて、機械化がどんどん進んでいって、そして機械および技師が重用されて、古い炭鉱夫とか役に立たない効率的にできないというものは全部はねられていくという、そういうリストラのようなことも起こってきたのです。それが激しくなってきた。その中でジェラルドの父親は、炭鉱事故で亡くなった坑夫の未亡人には、ただで石炭を分けてやるとか、それとも困ったと言ってくる時、または子供が病気だといって来るたびに、ポケット・マネーをやるとかというふうな慈愛に満ちた父親的経営者の姿を貫いてきたわけです。でも、いかにそれを貫こうとしても時代の流れというのはせき止められなくて、まして自分が歳をとってきたときに、数ある炭鉱の中でも、経営のいい所と悪い所で差ができて、どんどん潰れていくわけですから、彼は息子に任せざるをえない。息子は容赦なく合理化をはかって、そして機能的な素晴らしい炭鉱にして利益をあげて、それが結局、労働者達にも給料が払えることになるんだ、と言う。それに対して父親は、ものが言えなくなってきました。言えないけれども、労働者たちに対して悪いことをしているような罪悪感に苛まれていて、彼らを一種、偶像化して崇める、慈悲を施して満足感を得るといふ心理がある。そこへその弱点をねらって、お父さんの方に言えばなんとかなるだろうというので、ちょっと乞食的といいますか、哀れっぽく泣き言を言う連中に、影でいろんなものをやる父親の姿があるのです。そんな形で父親の中には、自分の人格の表の理想と裏の現実のギャップというのですか、その綻びがどんどん進む。それから、彼の肉体が衰えていく。一つの古きよきイギリスの形が滅びていくというのと、ジェラルドの父親の死というのが重なっている。癌かなにかだと思ふのですけれど、最期まで死を認めようとしないう父親、ということになっています。

そのお父さんの死を、長男のジェラルドがじっと見つめつづけるのです。インディアンが生きてまま皮を剥がれるとか塩を擦り付けられるとかいう恐ろしい拷問の話がありますが、西部劇なんかに。そういうイメージで語られることもあります。自分が父親を死に追いやったと悩むのです。精神的に。そんな

やり方ではだめだというふうにして合理化を進めてきた。あるいは、お父さんがやっていることは欺瞞だ、ということ暴露してきた。でも、それに代わるものを示せるか。じゃあ、自分がそこから育まれてきたものの中身を否定した上で、それに代わる何の中身を自分は見出せるか。それがジェラルドにはないわけです。ただ産業の戦いは引き継いで、もっと効率的に追求していくんだけど、お父さんがその中に見つけてくれた、かつて信じさせてくれたような愛とか平等とかそういう尊い価値というものの、何一つとして今の自分には信じられない。そういう状態に追いやったのは自分だと、自分自身の死を見つめているような感じで、毎日毎日、苦しんでいる父親の、死に抵抗する姿を見ていたのです。

そういう状況の中なんですけれども、たまたまアーシュラとグドルーンが踏み切りで待っているところに、ジェラルド・クリッチが栗毛のアラブの牝馬に乗って駆けてきた。さっそうと走ってきた。

彼は上手に柔らかく馬を乗りこなし、膝の間に挟んだこのデリケートな震えを楽しんでいた。

馬に乗っているときだけは、って感じがします。あるいは、水の中に飛び込んで泳いでいる彼の姿もいきいきとしてるんですけれども。

そして彼は、少なくともグドルーンの目には非常に美しく映った。馬は長い尾を空中になびかせており、ジェラルドはやわらかく、ぴったり、そのほっそりした栗毛の馬にまたがっていた。

というふうに、始めはそうなんです。ところが機関車が、汽車がやってくる。

機関車は見えなかったが、土手の間を音を立ててゆっくりと近づいてき

た。牝馬はそれを好まなかった。

これは文明と自然の対比だと思っていいですね。

馬は知らない音に傷つけられたかのごとく、後ずさりし始めた。しかし、ジェラルドは馬を引き戻し、踏み切りの方に向けた。荒い音を立てる機関車のするどい破裂音は、ますます馬に圧迫を与えた。連続的な何か判らぬ恐ろしい鋭い打撃音は馬の体を貫き、遂には恐怖のあまり体を上下に揺すぶり始めた。馬は外されたばねのように退いた。しかしジェラルドは輝くようなかすかな笑いを浮かべた。彼は馬の首を再び立て直した。馬は仕方なく彼に従った。音は急に大きくなり小さな機関車が鋼鉄のクランク型の連結器を急速に動かしながら現れた。馬は熱した鉄から跳ね返る水滴のように飛び上がった。アーシュラとグドルーンは恐ろしくなり、生垣の中に体を押し付けた。だが、ジェラルドは馬を重く押さえつけ、もとの位置に力づくで据え直した。それは見る者に、彼は馬の中に沈みこんだ磁石であり、馬の意志に逆らって向きを変えさせうるかのように見えた。

「ばか、ばか。」

と、アーシュラは大声で叫んだ。「なぜ汽車が通り過ぎるまで馬を離しておかないんでしょう。」

グドルーンは黒い見開いた呪縛されたような目でジェラルドを見ていた。しかし、彼は顔を輝かし、かたくなに、きりきり舞いする馬を押さえつけていた。馬は跳ね上がり向きを変えようとするが、どうしても騎士の確固たる意志から逃げることもできず、体を貫いて走る喧騒から逃れることもできなかった。列車はゆっくりと重たげに恐ろしく、一台一台、あとからあとからと踏み切りの線路を通り過ぎていった。機関車は自分に何が出来るか試すかのようにブレーキをかけた。するとトロッコの鉄鋼の緩衝器がシンバルのようなおそろしい轟音をたて、列車の前から後ろの方へ伝

わってきた。馬は口を開き、恐ろしい風にあおられたようにゆっくり立ち上がった。それから恐怖に体を震わせ、突然、前脚で地をけて馬は後退した。二人の娘は、馬が倒れて彼を下敷きにするだろうと感じて抱き合った。だが、ジェラルドは、体を前に傾けなおも変わらぬ楽しそうな顔を輝かせていた。そして、遂に彼は馬をもとの姿勢に引き戻し、背中を踏み切りの方に向けて押さえつけた。しかし、馬の完全な恐怖の反応は、彼の強制の圧力と同じくらい強かった。馬は跳ね上がり、線路に背を向け二本の脚で棒立ちになり、つむじ風の真中にあるかのように、ぐるぐる回転した。グドルーンは、それを見ると心臓に突き刺さるような鋭い目まいを感じ、気絶しそうになった。

「だめ。だめ。いかせて、いかせて。ばか。ばかったら。」

と、アーシュラは完全に我を忘れ、あらん限りの声で叫んだ。グドルーンは夢中になっている姉を憎んだ。アーシュラの声のひどい生々しさと、その強さは耐えがたいものだった。ジェラルドの顔は引き締まった。彼は馬の急所を鋭い歯で突き刺すように強くしめつけ、力づくで馬を回転させた。馬の息遣いは咆哮に近かった。その鼻腔は熱して広がり、口は開き、目は血走っていた。目を背けたくなるような光景だった。

というふうが続いていくのです。

その間も、無限に続くトロッコは一台一台、次々と、決して終わることのない悪夢のようにゆっくりと重い音を立てて線路の上を通っていった。

この場面の、馬に対する人間の残酷な機械的な意志の力というのは、おそらく感じた方もいるでしょうけれど、第一次世界大戦に追いやられていく若者達もまさにそうであったと思わせるものです。その機械的な、目は血走っていたとか、口から泡を飛ばしながらとか、馬を追い詰めていく呵責なさ。でもそれ

は、しなければならないという意志なんです。次から次へといつ終わるともしれない。第一次大戦でも、あつという間に終わるだろうと思っていた戦争が四年間続いたわけです。塹壕戦という日々の戦いで、いつ塹壕の中にいたって爆弾が落ちてきて、たまたまそこに落ちると塹壕ごと吹っ飛んでしまうわけですから。そういう恐怖の中で、シェルショックと呼ばれる精神病になるわけですが、もう夜、眠れないという兵士は当たり前であって、夜中に悪夢にうなされるとかは当たり前であって、ひどい人たちは送りかえされて精神病院に入ってくる。そういう話が、スコットランドの或る精神病院でサスンとかオーエンなどの詩人達が出会ったりする物語が、『再生』(Regeneration) という、パット・バーカーの小説に描かれています。この「再生」という言葉はアイロニックなんですが、「再生」すなわち精神病院でまともに精神が機能する状態にまで回復すると、また、戦場に送られるわけです。ですから、医師達は、この人たちの病気を、精神の病を治してあげるってことで、また死の場へ送るという非常に矛盾した立場にある。しかし、医師として、やはりその人間一人に向かって話を聞いてやり、その悩みを聞いてやり、言えない事を言えるようにしてやるために精魂つくして働いていた。言葉を失う人とか色々いるんです。暴力的になる人もいれば。このパット・バーカーの『再生』っていう小説には、そういう医師の悩みなんかも描かれています、これは映画も最近、来てるんじゃないかと思えますけれども、来たら是非、ご覧になるといいと思います。そこにも、ありありと示されているのが、終わり無く「無限に続く」という感覚です。

無限に続くトロッコは一台一台、決して終わることのない悪夢のように、ゆっくりと重い音を立てて線路の上を歩いていった。連結環は張力が変わるたびにきしり、馬は前脚で地を蹴り機械的に飛び跳ねていた。

「馬が血を流している」

と、アーシュラはジェラルドに対する反抗と憎しみに燃えながら叫んだ。

## 見えない戦争

彼女だけが彼を完全に純粹な敵と見なしていた。グドルーンは、馬の脇腹に血が滴っているのに気が付き、青くなった。そのとき、ちょうどその傷の上に輝く拍車が当てられ、仮借なくそこを押し付けた。グドルーンの周りで世界がぐるぐると回り、消えていった。彼女は、それからは何もわからなくなった。

これは非常にサディスティックな、性的な意味でも解釈されたりする場面なんですけれども、それだけではなくて、そういう文明という、機械文明というものと人間の意志との日々の戦いの恐ろしさと、そしてその延長線上にある第一次世界大戦と重なっていると思うんです。

ロレンスは『恋する女』(Women in Love『恋する女達』というのがより正確な題ですが、)において、時代設定、何年という事を全然明らかにしていません。それは意図的なんです。ロレンス自身が手紙で書いているんですけど、

私はこの小説の date (何年ごろの時代のものだ、ということ) を書かない。なぜなら、それは今というか全ての時代、現代ということを感じて欲しいから。

ということ、言っています。戦争の場であっても、それから女と男の戦いということからいっても社会のなかでの個人の尊厳とか、何を生きがいとするかにおいても「戦い」であるということなんです。そういう戦いの、意味のない戦いのような感じですよ。なにも機関車が通り過ぎてから行ってもよいわけで、何のために馬を向かわせているか。まるで意味がない。でも、では私たちが日頃やっている戦いは意味があることをやっているのかって言われたら、一つ一つ考えていくと、それはたとえばお金を蓄えるためであると言う。なぜ蓄えなきゃいけないか。これは生活を支えるため。なぜ生活を支えるか、子供を育てるため。なぜ子供を育てるか、これは立派な人をつくるため。なぜ立派な

人を作るのか、立派な人ってどういう人なのか、何をするためなのか。とまあ、蜿蜒と輪が続いていくわけですが、結局、自分自身が、たとえば子供がではなくて自分自身が何を目標とし、何を拠り所に、何を実現するためって問いが問われないうままに、ひたすら何かに向かって駆り立てられると。でも、それをするのが男ではないか。それをするのが責任のある人間、市民じゃないか。それをするだけでしか生きていくことはできないではないか、っていう悲鳴にも似たような声が聞こえてくる。でも、ここでジェラルドは、それをするからには楽しそうに、いやいやではなく、おじけるのではなく敢然と実行する、恐怖を乗り越えた存在になっている。英雄なんです、そういう中での。ですからヘルメスにも例えられる。ギリシャ・ローマ神話の中の軍神、死の神です。死をも恐れないというような、そういう皆が死んでいく運命だけれども、その無意味な戦いの中でも、死を不恰好に迎えるとか、その中で挫折するというのではなくて、あくまで自分というものは崩れないっていうか、乗り越えていく力をもっていくというような意志をみせる。これは女の人達の前ですから、余計に格好良く見せているということも当然、あるでしょう。

しかし、そのグドルーンたち姉妹の前でそういう自分の強い所を見せたジェラルドなんです、いよいよお父さんの死を体験し、その後、夜、眠れない。何か鏡を見てても泡があって、その巨大な泡が自分の中にあって、その泡がはじけたらもう終わりというような妄想にとらわれたりします。それでグドルーンの傍に行きたいというのもありますし、それから、グドルーンはジェラルドを見つめつづけてくれたんですね、さっきの馬の場面でも。見つめつづけて、

“You should be proud!” (「あなたは誇りをもっていい！」)

って叫ぶんです。お姉さんのアーシュラのほうは、「ばか！」とか「なんでそんなことするの！」とか、そういう非難の言葉を浴びせる。あまりに生々しいその恐怖と敵意、嫌悪、憎悪というのを、そんな風に表してほしくないってグ

ドルーンは思うんですけど、同時に当然、一人の人間の中にそういう恐怖も憎悪もあると思うんです。あるけれども、それを表すんじゃなくて乗り越えられるという、その彼の勇気というのか「誇り」というものを最後の人間の尊厳というふうに、彼女は芸術家として評価する。そこに一種の美を見るのです。ですから“You should be proud!”と、叫んだっていうふうな女性なのです。

しかし、ジェラルドが次第に衰えていく父親の死をじっと見つめていくうちに、彼には自分に誇りを感じる、自分の存在の意味を感じるということは、もはや出来なくなっていく。父親の葬式の直後、一人で眠れぬ夜を過ごすことに耐えられなくなった彼は、結局、炭鉱町ベルドーバーにあるグドルーンの家、その寝室に忍びこんでいくことになるんですけども。お父さんのお墓のある教会に夜、歩いて行ってですね。目的意識を持っていったんではないんです。そうじゃなくて、行かずにいられなくて、教会の真っ暗な墓地の辺りの土を手で探りまして。何をしようとするのか。掘り出すということはしないんですけど、まさにシェイクスピアの『ハムレット』の場面みたいでもあります。これは、ハムレットが、墓掘り人によって偶然、掘り起こされた道化師のドクロを手にとって、かつて子供の自分を背負ったり笑わせたりしてくれた人物の生と死を見つめ、そのはかなさ空しさをアイロニカルに語る場面です。またエミリー・ブロンテの『嵐が丘』にもヒースクリフが亡くなった恋人キャサリンの墓を掘り起こすところがありますね。それから、やっぱり私は塹壕の泥(mud)を思い起こします。

ジェラルドは泥まみれになって、夜の道をグドルーンの所へ忍んで行きます。グドルーンは、「どうしてあなたは来たの？」と訊きます。突然、ベッドの傍に忍んできた男性が立っているとびっくりするわけですね。明かりをつけるとブーツを履いてる。そのブーツには泥がいっぱいついてる。だから、

“You are muddy.” (泥まみれね。)



という。そしたら、

“I was walking in the dark.”（「闇の中を歩いてきた。」）

なんてことを言うのですね。これらの語句は戦争詩人達の詩を連想させます。

ここに最初のほうでお見せしたサスーンの詩、“Trench Duty”なんかを、ちょっと思い出していただきたいのです。それをちょっと辞書を片手に読んでいただくと、trench（塹壕）の中でいかに mud（ドロドロの土）の中をいざって進んでいくかとか、その中に身を伏せるかとか、そういうのが描かれていて、そして最後に死んでいく。一人死んだというところで終わっていますけど。そして『恋する女達』の中でも、ジェラルドがブーツを履いてグドルーンの寝室に侵入し、それが泥で汚れていると言う。しかも、「泥だらけね」「闇の中を歩いてきたんだ」というやりとりの中で、彼は何か心の高揚を覚えたっていうところが出てくるんですね。やっぱりグドルーンがそれを見ている。ちょっと強引に見えるかもしれませんが、小説の創作当時の状況を知っていれば、どうしても第一次世界大戦のことを感じさせられるところです。そして、そんな突然、尋ねてきた彼を、本当だったら彼女は追いやりたいけれども、何か拒むことができないものを感じた。一種の「運命」を感じたという。で、そこで二人は結ばれるという展開があります。それから後、あたかもそんな風にして彼の命がグドルーンの判断に懸かっている、彼女が彼を避けがたい運命として受け容れることに懸かっているかのようです。

しかし、破局がくるんです、この男女の間に。

そしてもう一つの暴力的シーンというのが、アーシュラという姉のほうに関わって出て来ます。そこに登場する恋人たちはアーシュラとバーキンです。バーキンのほうは、もっと徹底的に現代文明っていうのを問うていて、そして、現代人というのは本当に愛することが出来なくなっている、と言います。出来なくなっているのに「愛」という言葉を使うということは欺瞞であり、愛をか

たらって、たとえば「愛のために」とか、「国への愛のために」とか、「家族愛のために」とか言って戦争にかり立てるのもそうかもしれない。それは愛でも何でもないものを使っているのだ。これは愛の墮落であり、恐ろしい。その意味のなくなったものは、もうないのだと。人間がこんなに呪わしい存在なら、人間もなくなったほうがいい。バーキンも、そんな事を言うような男性なんですけれど、二人の中の唯一の希望っていうのは、やっぱりお互いの中の純粋な命というか、男であり女であり、その野生らしさであるとも言っています。今までの理屈を越えた、なにか優しい、黄金の光が彼女の中にある、ってというような事を見いだしていく。その「見いだしていく」という過程の中で、非常に否定的なことが言われます。それでここは、男のほうのバーキンが、池の向こうに映る月光に向かって繰り返し、その中心に向かって石を投げるんです。「水の上で破裂した」なんていう描写が下のほうにあります。

輝く光がはね、月は水の上で破裂した。そして、白い危険な火の破片となってばらばらに飛び散った。打ち壊された火は、白い鳥のように急速に湖の紋を横切って沸き立ち、やかましく混乱し、攻め込んでくる暗い大軍と戦った。

これは、言葉によく注意して見ると戦争のイメージにも重なるんですが、本来は自然の、まさに静かな、他には何も音のしない自然の中に登場するイメージです。だから、普通は戦争のイメージとしては読まないと思います。

暗黒の波が、その下を中心に向かって走ってきた。しかし、全ての波の中心では、未だに完全に破壊しつくされぬ灼熱した月が生き生きと揺れ動いていた。白い火の塊は、身もだえし懸命に戦っていた。いまだ破壊しつくされず犯されもしなかった。それは激しく不思議に、喘ぎながら自分を立て直そうと盲目的な努力をしているように見えた。犯しえぬ月は強さを増

し、再び自己を主張し始めた。月光は細い光の線となって速度を速めた。月は再び力を得、勝ち誇って水面に震えた。

これは非常にシンボリックなシーンで、月が何を象徴しているか、みたいなことがさかんに言われるのですが、女性アーシュラの持っている力っていうふうにも言われますし、どんなに破壊しようとしても、否定しても否定しつくされないものがある。それが否定しつくされないというのは、本物だからとか、力強いからということも考えられるんだけど、もうひとつは破壊されようとするとき、執念深くどうしても破壊されないぞというような意志に変わってしまうとき、美しいはずの月光も非常に恐ろしい、気違いのようなとか、呪われたとか、そういうイメージに変わってしまうということです。

その変わってしまったイメージも、もうそれで終わりだ、ということではないので、再び生命を感じさせるような、創造を暗示するイメージに変わらぬとは言えない。実は、それに続くこの男女の会話の中で不思議に回復を感じさせるところが出てくるのですけれども、それはちょっと読む時間がありませんので、各自で読んでいただければいいと思います。

アーシュラとパーキンの会話では、「あなたは本当に私を愛している？と彼女は言った。」っていうようなところに見られるように、「愛」そのものが、どちらかが否定的になったり肯定的になったりする中で、ずっと問い続けられるテーマなんですけれども。

「それは君のときの声だと言いたいね。」

彼はおもしろそうに答えた。

「君の言い張り、君のときの声は『ブラングエン、ブラングエン』古い戦いの叫びだ。君の叫びは『あなたは私を愛している？武器を捨てるか、死か』だ。」

「愛している」と言わなかったら死だけがある、という風な「愛」というものを、なかば皮肉になかば滑稽に言っているんです。愛し合っている二人ですから、言える冗談かも知れませんが。アーシュラは、「違うわ。」って言うんですけど、実はそこには、男と女の戦いという中に追求されている問題があります。

そして、二組の男女の恋愛の中で、いよいよジェラルドとバーキンの違い、ひいてはアーシュラ-バーキンとジェラルド-グドルーンの関係の違いが見えてきます。バーキンのほうは、まだ冗談を言ったり、それから非常に否定的な気持ちになるときもあるけれども、本当に純粋な子供のように言うか、イノセントな二人というものを理屈を超えて発見するような、いわば「跳ぶ」というところがある。どうして二人の間に可能なのか、ということをも自分達もわからないというところがあるんですけども。

グドルーンとジェラルドにはそれがないのです。ですから男女の力、どっちが支配し支配されるかっていう闘争になっていくわけです。

「あなた愛することなどできないでしょ。私のことを愛してないでしょ。あなたに愛する力なんてないでしょ。今までも愛したこともないし、これからは愛することはないでしょ。」

というふうに相手を責めていく。そうすると相手は正直に言おうとする。真実の声ですね。

「愛してない。愛してない。できない。」

という答えを言う。言わされる度に深い淵の中に落ちていく。この一種の恐ろしい戦いのようなものが繰り返されて、最後はアルプスの雪の中に、疲れ果て、全てに嘔吐を感ずるほど虚しくなったジェラルドが踏み込んでいって、そして死んでしまう。凍死してしまうわけです。

なぜそんなことになるのかってことを考えるには、バーキンがアフリカの彫像に触れて言っていることが参考になります。アフリカの不思議な妊婦の像なんですけれども、下のほうのお腹が膨れていて、何か長い体なんですけれども恐ろしい、私たちにはわからない神秘があると。それは私たちの美の意識ではないし、文明の意識でもない、と言っています。だんだん腐敗していったアフリカの古代文明の一種の頂点を表している、と。私たちの時代も腐敗にむかっている。もう徐々に腐敗している。崩壊していく、と。私たちの腐敗は彼らの腐敗とは違って、雪の世界の中に腐敗、崩壊していこうと予言しています。だから近代文明、産業主義文明というものが、古代エジプトやアフリカのたどったような分裂と崩壊の過程とは全く形は違うけれども、やはり崩壊していくであろう、と破壊的プロセスを予言しているんですけれども、ジェラルドの物語は実際、そのように展開することになります。

その証人のようにバーキンは、ジェラルドの遺体をじっと見つめます。これは本当に、男同士ですけれども愛するというほど強い関係、友情を超えた何かを求めながら、その願いが挫折するという場面でもあります。ジェラルドは、互いに兄弟愛、兄弟の誓い合いをしようというふうにバーキンが強く求めた相手だったんですけれども、ジェラルドはそれに何か乗っていけないなというふうで、本当に強い絆というところまで到達しないうちに死んでしまうんです。それでその死体を、凍った死体をバーキンが前にするところです。

バーキンは宿に戻り、またジェラルドのところに行った。彼はその部屋に入り寝台に座った。死、死、死、そして冷たい。皇帝シーザーも、死んで土に化せば穴を塞ぎ風を防ぐだろう。

最後の一文は『ハムレット』の一節なんですけれども、そういうことを言う。

以前、ジェラルドであったものから、何の反応もなかった。不思議な凍っ

た冷ややかな物質。それ以上のものではない。それ以上のものではない。

シーザーの死っていうのはアルプス越えの時の、負け戦の時の戦争のイメージなんですよ。土に化せば穴を塞ぎ、風を防ぐしかない。それだけの意味しかないってことなんですよ、シーザーであっても、英雄であっても。そして、アーシュラが「充分に見たでしょう。」と、いうと、

「こんな風になることは望まなかったのだ。こんな風になることは望まなかったのだ。」と彼 [バーキン] は自分に向かって叫んだ。アーシュラはカイザーの、[これはドイツ皇帝のカイザーです。第一次世界大戦を始めたのはカイザーです。途中で革命が起こってしまいますけれど。] “Ich habe es nicht gewollt.” [「私はそれを望まなかった。」] という言葉を考えずにはいられなかった。

これは唯一、この小説が第一次世界大戦に直接、言及したかもしれないという言葉なんですよ。カイザーのこの言葉がいつ言われたかという、第一次世界大戦開戦一年の記念日に、カイザーがドイツ国民に向かって演説したときのものです。ものすごい数の人々が死んでるわけですよ、国民が。だから、自分がこの戦争を始めたときには、私はそれを望まなかった、こういう風なことが起こることを望まなかった、ってことを言ったっていうのがあるわけです。

アーシュラはカイザーの、「私はそれを望まなかった。」という言葉を考えずにはいられなかった。彼女はほとんど恐怖をもってバーキンを見つめた。

こういう一つの文章の中に複数の重なるイメージとして、シーザーの、古代

## 見えない戦争

ローマの時代からシェイクスピアの時代から第一次世界大戦のこの戦場から、そして、そのジェラルドという戦場で死んだのではないけれども死んだ男と女の戦い、そして産業文明の中に英雄的に懸命に生きようとしながらも自分の意味を見出すことができなかつた人間が出て来る。一番左のページです。

そしてジェラルド、否定者。彼は心臓を、冷たい凍った脈を打ち得ぬものにしてしまった。ジェラルドの父親も心残りげに心臓が破れんばかりの顔をしていた。しかし、この冷たいもの言わぬ物質のような恐ろしい顔ではなかつた。

死を否定してなんとしてでも生きたいと願っていた、その父親の恐ろしい顔よりももっと恐ろしい。冷たい物質のような恐ろしい顔である、ということです。

バーキンは見つめに見つめた。アーシュラは、死んだ男の凍った顔に目を据えてみつめる生きている男を、そのそばに立って見つめていた。

これは見つめる、見つめる、見つめる、とあるのですけれども。先程わたしたちが最初に見た写真ですね、死んだドイツ兵とこれを写真に取る人、またそれを見つめる人、そしてそれを見ている私、皆さんというのがあるわけです。みんな、それぞれ見つめる、見つめられるってことの意味があるわけなんですけれども、それも自分だってことも言えるわけです。分身っていうのでしょうか。だから私達は、そこに共感だとか悲しみとかを感じるわけで、自分の分身をその写真の中に、あるいは男の顔の中に見るであろうと思います。

どちらの顔も動かさえず動きもしなかつた。「もう充分に見たでしょう。」と彼女は言った。

## 見えない戦争

というふうにあります。

興味のある方は、この『恋する女達』をそんなふうな角度から読んでいただいたらあり難いと思います。今のイラク情勢も含めて、テロも含めて今日にも非常に不気味な、この教室には見えない戦いがあるわけですがけれども。皆さんの生活の中にも、また前の世代の人々の生活の中にも、各自の戦いというものがあるという目で見ると、恐ろしいかもしれませんが、また発見することもあるだろうと思います。



Summary

## The Invisible War: D. H. Lawrence and the Great War

Masako Hirai

The general purpose of this paper (based on a lecture) is to introduce the perspective of 'the invisible War', what went on in the world behind and at a deeper psychological level than the actual warfare. More specifically, this is an attempt to cast a new light on *Women in Love*, Lawrence's novel written during the War, by focusing on the half-hidden reference to the poems of the trench-war and the implicit images of the War, violence, and madness, which are scattered behind the story of love, family life, industry, socialization, education and art.

Ninety years after the First World War, by contemplating on the graves, the photographs, and the poems of the War, we can now observe what lay behind the actual violence and deaths. Even between the gun-fires, poets like Sassoon and Owen wrote about the futility and horror of the trench-war. A moving photograph, taken by a British soldier, registers the enemy soldier, dead but still sitting by the flooded trench as if alive, and the back of another British photographer just walking away from the sight. A grave-stone with the inscription, 'shot at dawn', tells the resistance of the dead soldier's family against the inhumanity and forgetfulness of the world. The monuments for the dead, erected by those who survived, also tell the stories of disillusion in the civilization which had once promised wealth and a better world but ended in the sense of loss.

Not only the War-poems but other literatures written around the War

represent the fatal spirit. Lawrence never fought in the War, partly for his physical condition, but his poverty and isolation during the War caused him to fight the bitter war of martyrdom in England. His German wife made people suspect him for a spy. The banning of his previous novel, *The Rainbow*, killed almost all his hope for publication. What could a man like him do, with the eyes to see what other people did not see in the world during the War, yet deprived of any means of making himself heard? The couple, living close to the Zennor cliff in Cornwall, were joined by J. M. Murry and Katherine Mansfield who suffered nervous-breakdown after her dear brother died in France.

One of his short stories, *England, My England*, more directly represents Lawrence's sense of his ineffectuality, distance and fate of death along with others, while registering the death of his Morris-like medievalism and romantic farming in the Anglo-Saxon nature. With an attentive ear, we also hear in *Women in Love* the words of the War-poets 'walking in the dark' and in 'mud', and even the regretful voice of Kaiser during the War: 'I did not want it to be like this.'